真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

ひのきしんで感謝と喜びを

教祖百四十年祭

本部春季大祭後、おやさと伏せ込みひのきしんを実施（1月26日）

やしきハかみのでんぢやで
まいたるたねハみなはへる　七下り目 八ツ
こゝハこのよのでんぢなら
わしもしつかりたねをまこ　同 九ツ

かしもの・かりものの教えを心に治めると、親神様の御守護を身に感じて、「ありがたいなあ、結構だなあ」という思いが湧いてきます。その感謝と喜びの心を態度や行いに表すことがひのきしんです。

一般的に「寄進」とは、豊作への感謝や物事が成就したときにする神仏への特別な奉納のことを指しますが、お道では、報恩感謝の心で自分の身体を使ってする行いをも「寄進」としてお受け取りくださいます。ですから、貧富や老若男女の区別もなく、日々心一つで誰にでもできることなのです。その行いはたとえすぐに形に現れる見返りがなくても、その真実を親神様が確かにお受け取りくださり、後々結構な姿をお見せくださる種蒔きになっているのです。

おぢばは「かみのでんぢ」であり、蒔いた種はすべて生えてくるとお聞かせいただきます。種とは私たちの心遣い。欲を忘れ、喜びと感謝でひのきしんに励めば、必ずそれが喜びとなって実ってきます。ひのきしんで神様や周囲の方々に喜んでいただき、その喜びを自分の喜びとする。ひのきしんとは、欲を忘れて真実を尽くす、ようぼくの生き方そのものなのです。

四方正面

「形は消えても理は残る」と教えられる。人間が生涯で行ってきたことは、どんなことでも一つ一つそのまま残る。善いことをすればその事実が、悪いことをすればその事実が、そのまま天の帳面に記され、それは目に見える形のものが、目に見えないものに変わって残されるのである。

そして、やったことはそのまま「種」となり、我が身、我が家につきまとう。「身に覚えがある」、隠し事ほどよく身に付く。神様は、人間がどのような通り方、生活の仕方をしているのか、常に御覧くださっている。

人間は、心通りに行動をとり、蒔いた種はどこへも行かず、必ず芽生えてくる。自分自身に芽生えてくることもあり、子や孫の代に芽生えてくる場合もある。

年祭活動仕上げの年の一つの目標である「おやさと伏せ込みひのきしん」は、正に種蒔き。神の田地と仰せいただくぢばに、真実の種蒔きをさせていただこう。（竹）

《春季大祭　挨拶》

おさづけを取り次いで教祖の親心にお応えしよう

大教会長　井筒梅夫

皆様方には、教祖百四十年祭に向かう時旬の道の上にご丹精をいただき、誠にご苦労様です。

春の大祭は、明治20年陰暦正月26日、教祖年祭の元一日を祈念して勤めさせていただきます。そこで、改めて年祭の元一日について、思案してみたいと思います。教祖は、子どもの成人を促される親心から現身を隠されたと聞かせていただきます。教祖が現身を隠された経緯を簡素に申せば、教祖はおつとめを急き込まれる。それは、おつとめを勤めなければ陽気ぐらしは実現しない、だから、世界たすけのもとだてであるおつとめの勤修を厳しく激しく急き込まれる。しかし、おつとめを勤めれば、教祖が警察へ連行されて厳しい仕打ちを受けられるものだから、初代真柱様や先人方はおつとめに踏み切ることができない。教祖にしてみれば、御自身の姿がある限り、人々はおつとめを躊躇（ちゅうちょ）してしまう。そこで教祖は現身を隠されたのです。

そして、教祖は御存命の理になられた。それまではお道の先頭に立っておられた教祖は、陰に回られて、存命の理のお働きを持って、世界たすけの先頭にお立ちくだされるようになったのです。これが元一日のあらましです。

飯降伊蔵先生を通してのおさしづで、

子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としっかり見て居よ。　　**明治20年2月18日**

と、姿は隠したけれど、今まで通り存命同様に世界たすけに働く。だからこれから先の道をしっかりと見ていよと仰せになって、

さあ、これまで子供にやりたいものもあった。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だん〳〵に理が渡そう。　同前

広くおさづけの理をお渡しくださるようになりました。このおさづけの上に、教祖は御存命の理の働きを表わされて、不思議なたすけが各地で次々と上がり、教祖十年祭までの10年間で教勢が1000倍化するほどに道は破竹の勢いで伸び広がって、現在の教会組織の土台ができたのです。

ところで、教祖が御姿を隠されたときに果たして周囲の人々はそこに親心を感じたのかと考えれば、そんなことはなかったと思います。教祖は115歳までおいでくださって、私たちを導いてくださると固く信じていた先人たちは、教祖は生きてそこにいらっしゃらないという現実を前にこれからどうなるのか、誰にすがればいいのかと、ただただ驚天動地、驚愕、落胆の体であったのです。

教祖は御姿は見えないが存命同様に働いてくださると頭で理解した人はあったかもしれませんが、この状況に親心を感じた人はいなかったに違いないと思います。先人たちがこの元一日にこもる親心を感じたのは後々のことで、それは、おさづけの理を頂戴してようぼくになり、各地でおたすけに励む中に、おさづけの取次ぎで不思議な御守護を頂くようになったからでありましょう。

これまで教祖しかなし得なかった不思議なたすけと同じ御守護が、今私が取り次いでいるおさづけの上に現れてきた。教祖は、御姿は見えないけれど確かに働いてくださっていると、存命の理を実感したと思います。また、私たちがおさづけを取り次ぎ、おたすけに努めることで、教祖存命の理を実感できると思います。そこで現われてきたさまざまな理を通して、教祖の親心を感じることができる。そして、おさづけを取り次いでおたすけに勇ませていただくことが、教祖の親心にお応えすることになります。

今年は、年祭活動3年目、三年千日を仕上げる年です。お道の信仰は、親神様の思召にお応えさせていただく信仰です。世界の人々をたすけて陽気ぐらしを実現したい、そのためにたくさんのようぼくが欲しい、これが親神様の思召の中心の部分です。この親の思いにお応えできるよう、お互い一人ひとりが教祖の道具衆としての自覚を一層高め、おさづけの理をしっかりと携えて、御存命の教祖のお供をして、勇んでおたすけに励ませていただきたいと思います。

今年は「一教会一名以上の修養科生の御守護を頂こう」、これを活動目標に掲げています。これもまた、親神様の思召にお応えさせていただくための取り組みです。おぢばでたすけていただき、おぢばで成人をさせていただき、実動ようぼくへの歩みを進めるための活動目標です。修養科生の丹精を念頭に置いて、一手一つに時旬の御用に励ませていただいて、仕上げの旬を務め切らせていただきたいと存じます。

教祖百四十年祭まであと丸1年、共々に一生懸命に歩ませていただきましょう。

（要約）

立教百八十八年　春季大祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には神人和楽の世界を楽しみに、この世人間をお創め下さり、元初まりのお約束によって教祖をやしろにこの世の表にお現れ下され、深淵なる親心と尽きせぬ御恵みをお垂れ下さいまして、陽気ぐらしへとお連れ通り下さいます御慈愛の程は、誠に有難く勿体ない極みでございます。私共は賜る御厚恩を片時も忘れることなく、御恩報じを念じて日々心勇んで時旬の上に励ませて頂いておりますが、その中にもこの月の二十六日は、教祖が子供の成人を急き込んで、扉を開いて世界ろくぢに踏み均しにお出まし下さいました、忘れ得ぬ教祖年祭の元一日の日柄でございますので、ご本部にて春季大祭をお勤め下さいますが、その理に倣い、只今から役目にあずかる者一同心を合わせ、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、春の大祭を執り行わせて頂きます。

御前には折柄の寒さも厭わず参り集いました芦津の道の子達が、お歌を唱和して、相共につとめに勇む状を嬉しく御照覧下さいまして、親神様にもお勇み頂き、世界たすけの着実な歩みを御守護下さいますようお願い申し上げます。

尚、今日の大祭に世話人・島村廣義先生のご巡教を頂き、おつとめに引き続きご講話を頂きます。お運び頂くおぢばの理を受けて、ぢば一条の精神で時旬の御用に勤め励ませて頂きたいと存じます。

さて、年祭活動三年目を迎えて、私共をはじめ芦津の理に繋がる教会長、ようぼくは、どうでも教祖にお喜び頂けるよう心の成人に只管励み、年頭の心定めの完遂を目指しておたすけと丹精に真実を尽くし、たすけ一条に一生懸命に動き働かせて頂きまして、三年千日を勇んで仕上げさせて頂く決心でございます。

更には、世界一れつをたすけて陽気ぐらしを実現するために大勢のようぼくがほしいと思召されるをやの御心にお応えできるよう、「一教会一名以上の修養科生の御守護」を目標に皆が心を揃えて、精一杯丹精を重ねてまいる所存でございます。

何卒、この決意の程をお受け取り下さいまして、願い出ます身上たすけ、事情治めの上には不思議鮮やかな御守護を賜り、お誓い申し上げた心定め通りのたすけの理と丹精の実をお表し下さいまして、教祖百四十年祭までの一年、悔いなき年祭活動を勤め抜かせて頂けますようお連れ通りの程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《春季大祭　神殿講話》

教祖の御心にお応えできるように
心定め達成を第一の目標に

世話人　島村廣義先生

只今、「諭達第四号」を拝読させていただきましたが、そもそも教祖の年祭を勤めさせていただくことはどういうことなのかと申せば、「よふぼく一人ひとりが教祖の道具衆としての自覚を高め、仕切って成人の歩みを進めることが、教祖年祭を勤める意義である」と、お諭しいただいております。

教祖が定命を25年縮めて、御姿を隠されたのはどうしてなのか。子供をたすけたい故の親心からであるとお教えいただきます。どうして御姿を隠されたのか。御姿があるがためにお教えいただくおつとめができなかった、おつとめに踏み切ることができなかった当時の初代真柱様を芯とした先生方のお気持ち、お心を教祖も慮（おもんぱか）りて、しからば姿を隠して誰気兼ねなくこのおつとめが勤められるようにしてやろうという親心。このおつとめは、取りも直さず、たすけ一条のためお教えくだされたおつとめです。

官憲の迫害干渉は、御姿があるということを一つの原因に、教祖へ集中して、いろいろと迫害干渉をしてくるなら、私が姿を隠してやろう。姿を隠すけれども存命のまま、今までと同様、たすけ一条の先頭に立って私たちを導きくだされているのが教祖であります。

御姿を隠されるようになったことから、親神様は私たちにそれぞれ国々所々、もちろん教会本部もそうですが、教会名称をお許しくださるようになって、そこを拠り所に、皆がお教えくだされたおつとめを勤められるということ、さらには、おさづけの理を広く一般に、私たちにお渡しくだされるようになった。たすけ一条の道としてお教えくだされるつとめとさづけは、この教祖が御姿を隠されることから、私たちにその理を許されたたすけ一条の道であります。

誰気兼ねなく布教ができる、この御教えを世界の人々に教え伝え、そして陽気ぐらしの世の中に立て替えさせていただくための活動、歩みを進めることができるように、教祖はしてくださったわけです。御姿は見えませんが、今も存命のまま元の屋敷にお留まりくだされて、世界一れつをたすけるために先頭に立って私たちをお導きくだされ、お連れ通りくだされているわけです。

教祖の道具衆とは

大事なことは、教祖の道具衆とはどういうことなのか、ということです。教祖の道具衆という意味は、教祖の御姿が見えないわけですから、その御姿が見えない教祖のお働きの理を、私たちようぼく一人ひとりが具現していく。具体的に姿形に表してたすけ一条の道を推し進める。教祖のお働きの手だすけ、お手伝いをさせていただく。その御用をつとめさせていただくという意味で、ようぼくを教祖の道具衆と位置付けくださるのは、そういうことなんです。教祖のお働きを具体的にようぼくが一人ひとり、たすけ一条につとめ切って、それを具現していく。これが教祖の道具衆という意味だと、私は思うのです。

そもそも道具衆という言葉は、元の理のお話の中に、人間ご創造のお話があり、元初まりに親神様に呼び寄せられて、そして親神様の御心に溶け込んで、御心通りに動いて人間創造のためにこのお役に立たれた方々を指して申す言葉ですが、親神様が人間をお創りくださるときに、その道具になられた方々が親神様の御心に溶け込ま

れたように、私たちが教祖の御心に溶け込んで、教祖の御心通りに素直に実行して、たすけ一条につとめ励ませていただくことが、私たちようぼくの使命です。

一手一つとは

大祭や月次祭の日に本部神殿でお参拝し、本部結界の側まで行って、このおつとめを拝ませてもらうと、そのおつとめの様子をよく分からせていただける。くにとこたちのみこと様、をもたりのみこと様を芯にしてお勤めくださっているつとめ人衆、先生方の様子がよく分からせてもらえると思うのです。

かぐらづとめは立ちづとめで、前へ進んだり、後ろへ下がったりしながら、またお手を振らせてもらいます。くにとこたちのみこと様、をもたりのみこと様は、真柱様と真柱奥様がおつとめくださいますが、そのくにとこたちのみこと様、をもたりのみこと様にしっかり心を合わせてお手を振らせてもらわないと、おつとめができないのです。

足の踏み方も、皆きちっと一手一つに親神様の御心に溶け込んで勤めなければ勤められないのが、かぐらづとめなんですね。あのおつとめを拝ませてもらうと、そのことがよく分からせてもらえるわけです。

この人間創造のときの親神様のお働きを、そのつとめの理に表して、世の中を陽気ぐらしに立て替える。そのために教祖が50年かかってお教えくだされたおつとめです。

そのおつとめに全てが象徴されているわけですが、親神様の御心に一つになるということがいかに大切かということ。人間創造の御守護を頂くすべですし、それがつとめの理によって、今度は陽気ぐらしに世の中を立て替えるというおつとめです。皆が一つ心になるということが一番大切なことを、私たちはそこで学ばせてもらうわけです。

年頭のご挨拶で真柱様は、「一手一つというのは、一つの目的に向かって、それぞれが自分の与えられた立場の務めをしっかり果たすことによってご守護をいただける姿と言うことができる」と、こう話しくださっているのです。

十柱の神様のおつとめくださる先生方の手は全部違うのです。誰一人として同じ手は振っておられません。皆それぞれのお働きの理を手振りに表してお勤めくださっているのですが、その目的とするところは陽気ぐらしということ。親神様のお望みくださる陽気ぐらしという一つの目的に向かって、それぞれが自分に与えられた努めをしっかり果たすということ。同じことをするというのではなしに、それぞれに与えられた自分の務めを果たすことによって御守護いただける姿、これが一手一つだと仰せくださいます。

そして一手一つになれば、自分一人では出せない力をお与えいただくことができ、また自分一人では味わえない喜びを味わわせていただくことができるんだということです。自分一人ではなかなか出し切れない、その力が合力することによって、素晴らしい大きな力を生み出すということ、また喜びもそうだと思います。

一手一つになるために加えて仰るのは、まず一人ひとりが教祖の思召に心を合わせることだと仰せいただくわけです。先程のつとめ人衆のお話も申し上げましたが、要は神一条、人間思案を一切かなぐり捨てて、神一条になり切ることが、この一手一つになるための

手立てであるということです。

どうでもこうでもの心で

真柱様は、神一条の心に徹して自分に当たった立場の役割、また今やらなければならないことに一生懸命取り組むよう求められました。そこで今まで年祭活動、年祭活動と言いながら、1年2年過ごしてきたわけでありますが、その年祭活動を振り返って反省するにどうだったのかということです。

教祖百四十年祭の活動というのは、まずは自分がどういう心を定めて、そして教祖にお喜びいただくような活動をさせてもらおうかと、その成人の目指すところを個個にしっかりと定めて、そして教会に繋がって、その教会の心定めに皆が心揃えていこうというのが今回の活動の進め方であります。

まだこれから1年あるわけですから、締めくくりにしっかり頑張って務めて、教祖の御心にお応えできるように、まずは心定め達成ということをそれぞれに第一の目標に、一生懸命取り組んでもらいたい。どうでもこうでも定めた心定めを完遂するということ。1年目、2年目でできなかったことを3年目にはその分も合わせて御守護いただけるように、心定め完遂をこの三年千日の最後の年にどうでもこうでもの心を持って御守護いただけるように、お互いに心合わせて通らせてもらいたいと思わせていただきます。

「頑張ったなあ」と教祖から言っていただけるようなこの年祭活動の締めくくりになりますように、芦津に繋がる皆様方もしっかり心定めてお通りいただき、泣いても笑ってもあと1年、とにかく頑張って御守護いただきたい、どうでもこうでもやり遂げるということをお互いにここで誓い合い、お話を締めくくりたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

（要旨）

春季大祭　祭典役割

祭主	大教会長	扈者	瀧本庄司	座りづとめ	大教会長 井筒敏成 湯川正圀 会長夫人 前会長夫人 榎理恵子	地方	瀧本眞二郎 山本義範 加世田洋	笛	岩切正教	琴	今川和子
扈者	守田清一	賛者	立花善三	前半	岩切正義 梶川和隆 木村真次 宗我邦代 竹内淳子 梶川文子		西本義之 樋川泰士 岡本久昭	ちゃんぽん	竹内義忠	三味線	井筒ちぐさ
賛者	新居里実	後半	花岡忠和 梶川和人 瀧本一太郎 山本広子 木村理恵 湯川照代				吉田裕樹 瀧本亘 梶川芳征	拍子木	井筒文夫	胡弓	中村美津代
指図方	奥田正徳							太鼓	今川政治		
献饌長	岩切正教	伝供	山本義範 加世田洋 岩切正義 西本義之 浜田宣郎 岡本久昭 花岡忠和 西本興正 今川聖一 村田光伸 湯川正信 吉田裕樹 川畑正博 望月慶太 梶川和人 瀧本亘 榎康紀 宗我道明 梶川芳征 荒木志朗 堤文雄 坂井清人 齊藤洋 大喜信人					すりがね	奥田眞治
								小鼓	山田道弘		

立教188年　教会長年頭会議

1月25日、26日、「教会長年頭会議」が詰所で開催され、教会長145名、代理10名、大教会在籍者26名が出席。教祖百四十年祭へ向かう年祭活動仕上げの年の一手一つの活動を誓い合った。

午前11時30分、本部お願いづとめに合わせて、おつとめ。教祖殿、祖霊殿を参拝した後、参加者全員で、西回廊の回廊拭きのひのきしんを行った。

昼食を挟み、午後2時より詰所大広間で親神様、教祖、祖霊様を遥拝した後、大教会長が講話（8～10面に要旨）。

本年の大教会の活動目標について話し、最後に「教祖百四十年祭まで泣いても笑ってもあと1年、御存命の教祖にご安心いただき、お喜びをいただける成人を固く誓って、共々に心勇んで一生懸命に動き働いて、悔いなき年祭活動を勤めきらせていただきましょう」と年祭活動仕上げの年を勇んで動くよう奮起を促した。

その後、各部各会の連絡。各会の主な行事は別掲。

続いて、表彰。昨年、初席者を著しく御守護いただいた、8教会に対し、表彰状と記念品が贈られた（下段に掲載）。また、昨年の年祭活動の目標が、「一教会二名以上の初席者の御守護を頂こう」だったことから、表彰教会とは別に、昨年初席者を2名以上御守護いただいた教会を読み上げて、その丹精を労われた。

その後、32班に分かれてねりあい。本年の活動目標である修養科生を御守護いただくために、活発な意見交換が行われた。また理づくりとしてのおやさと伏せ込みひのきしんについても話し合われた。

湯川正図役員の閉講挨拶の後、親神様、教祖、祖霊様を遥拝。

その後、会食。年代別のイントロクイズや福引を行い、楽しいひと時を過ごし、仕上げの年の勇躍を誓い合った。

翌日、春季大祭を参拝。祭典終了後のおやさと伏せ込みひのきしんには教会長はじめ芦津に繋がるようぼく、信者が大勢集い、除草作業を行った。

大教会長の講話

32班に分かれてねりあい

立教188年　心定め

初席者	420名
おさづけの理拝戴者	210名
修養科生	210名
教人	50名

立教187年　成果

初席者	210名
おさづけの理拝戴者	56名
修養科生	14名
教人	9名

【表彰された教会】

初席者	26名	真明新營教会
	11名	紀周分教会
	10名	日方分教会
	7名	大島分教会
	7名	真明彰化教会
	5名	脇町分教会
	5名	東大屋分教会
	5名	大崎原分教会

【婦人会】
- 4月19日　天理教婦人会第107回総会
- 6月29日　女子青年の集い
- 11月24日　芦津支部総会

【青年会】
- 6月29日　芦津分会総会
- 9月2日～23日　おやさとふしん　青年会ひのきしん隊
- 10月25日　第99回天理教青年会総会

【少年会】
- 3月29日　わかぎの集い
- 3月30日　第53回芦津団総会
- 5月24日　芦津団デイキャンプ
- 7月27日～8月3日　こどもおぢばがえり

【学生会】
- 3月27日　ＨＡＰＰＹ徒歩団参
- 3月28日　春の学生おぢばがえり
- 9月21日　芦津学生会総会

《立教188年 教会長年頭会議に於ける講話》

一生懸命取り組んで 悔いなき年祭活動を勤め切ろう

大教会長　井筒梅夫

年祭活動の３年目、仕上げの年を迎えました。１年目は、信仰実践に動くことを活動目標とし、その動きを継続しながら、「一教会二名以上の初席者を御守護頂こう」を２年目の活動目標として、210名の初席者ができました。

芦津としては、教祖百三十年祭の年以降で一番多い数であり、全教においても最も初席者のできた大教会の一つでもあります。これは芦津に繋がる方々が年祭活動に向き合って、おたすけと丹精に励んでくださったおかげと喜ばせていただいています。

そして３年目の今年は、「一教会一名以上の修養科生を御守護頂こう」を活動目標に掲げました。

初席者、修養科生と、具体的な目標を掲げた根底には、親神様の思召の根本にお応えさせていただきたいという思いがあります。

世界中の人々をたすけて陽気ぐらしを実現したいというのが、思召の根っこの部分であり、中心の部分です。そして陽気ぐらしを実現するために、たすけ一条に立ち働く大勢のようぼくが必要なんだと思召しくださいます。

初席はようぼくになるための入口であり、修養科は実動ようぼくに成人するための３カ月であると言えます。つまり、初席者や修養科生は、親神様の思召にお応えするための取り組みです。

私たち信仰者は、親神様の御守護のありがたさや信仰の素晴らしさはよく分かっていますが、世間の大半の人々はそれを知りません。いくら御守護がありがたくても、どれほど信仰が素晴らしくとも、それを伝える人がいなければ、陽気ぐらしへの道は進まないのです。

神様の世界、信仰の世界で、この道の教えを身に付けて、喜び心を湛えて、地域や社会の人々に信仰のありがたさと御守護の喜びを伝える。その役目を、人としていただいているのがようぼくであり、場所として許されているのが教会です。信仰の世界と世上の境界線にあって、なるほどの人として活躍するのがようぼくです。

親神様の思召に応えて通ることが大切な役目であることをしかと心に刻んで、殊にこの一年は修養科生の丹精を念頭において心揃えて励ませていただきたいのです。

３カ月の時間をお供えして

各々の教会の中で、修養科で成人した、運命が変わった、修養科でたすけていただいたという方はおられると思います。

ここ最近のことですが、あまり熱心でなかったようぼくが修養科で成人をして、所属教会や上級教会の月次祭に参拝するようになった人や、修養科で信仰に目覚めて、休みの日には夜行バスで関東から関西にある所属教会の月次祭を勤めに来ているようぼくもあります。

また、後を継ぐのを躊躇していた後継者が、修養科で決心がつき、教人資格、教会長資格と順調に歩を進めて、おぢばで心が定まって、今年教会長になってくれます。

また、本当にこんなことがあるのかというようなギリギリまで追い込まれていた方が修養科に入ってきました。よくぞここまで耐えたなという状況でしたが、２カ月目には「幸せです」と答えてくれました。この一言に、運命が変わってきているのを感じました。

皆さんの周囲には身上や事情で悩み苦しんでいる人、中には厳しい節のさなかにおられる人もあるかもしれません。また、この人には信仰者としてもう一皮むけてもらいたい、もう少し成人してほしいと願っている方もおられると思います。そうした方々には躊躇なく声を掛けて、修養科を積極的に

勧めていただきたいのです。

長い人生のわずか3カ月、これがその人にとって実に貴重な意義のある期間になります。3カ月という時間をお供えして、おぢばに伏せ込めば、親神様は必ず良き方向にお導きくださるに違いないと思います。「一教会一名以上の修養科生の御守護」を各々の教会の目標として、共に精いっぱい丹精をさせていただきたいと思います。

ぢば一条に心を結んで

さて、昨年の秋季大祭において、真柱様よりお言葉を賜りました。これからやることは、真柱様のお声にお応えして、もっと大勢のようぼくが教祖年祭に心を向けて、とにかく動き働いて、年祭活動に一生懸命に取り組むことです。

大祭の翌日には、表統領先生より年祭活動3年目の動きとして、「各教会が定めた目標と年頭の心定めの完遂」「おぢば帰りの推進」の2点が強調され、これを受けてたすけ委員会から、この具体的な2つの動きに全力で勤め上げることを全教の動きとしたいとの呼びかけがありました。

この中で、年頭の心定めの完遂とおぢば帰りの推進の2つには、おぢばという共通点があります。初席者やようぼく、修養科生、また教人は、おぢばに導いて丹精をしてできるもので、お供えはおぢばへの真実の伏せ込みです。

言うまでもなく信仰の原点は、おぢばです。おぢばに心を結んで、自ら足を運ぶ。人をお連れしておぢばへ帰らせていただく。三年千日を仕上げる本年は、おぢば帰りの推進に努める年であり、真実をおぢばに尽くし、伏せ込ませていただく年でもあります。

大教会では、毎月26日の本部祭典終了直後におぢば伏せ込みひのきしんを行います。おぢばへ帰ること、本部の大祭、月次祭に参拝すること、そしておぢばに伏せ込むこと。この3つを一度にさせていただく成人の機会です。ひのきしんの時間はわずか30分ほどですが、これが徳積みになり、理づくりにもなるのです。

また眞明組のおぢば伏せ込みひのきしんを5月と10月に実施します。こうした動きを一つの契機に、おぢばに精いっぱいの真実を尽くし運ばせていただいて、おぢばで成人をし、おぢばでたすけていただく一年でありたいのです。ぢば一条の信仰実践、これが年祭活動仕上げの年の全教の取り組みであります。おさしづに、

本部という理あって他に教会の理同じ息一つのもの。この一つの心治めにゃ天が働き出来ん。

明治39年12月13日

何でも親という理戴くなら、いつも同じ晴天と諭し置こう。

明治28年10月24日

とあるように、何でもこうでも親の理を戴くところに、どんなときでも晴天の御守護を下さるのです。おぢばが息を吐けば、われわれ教会の者も息を吐く。おぢばが息を吸えば、われわれ教会の者も息を吸う。おぢばから先々の教会までビシッと一本筋が通っている。これが親神様がお望みくださるおぢばと教会の本来の姿です。

「画竜点睛」という中国の故事があります。仕上げにあたって我が心に書き込む最後の一点は、申すまでもなくおぢばです。ぢば一条の心を定めるところに、私たちの信仰に命が吹きこまれるのです。

親の息に素直に添い切って通るところに天がお働きくださって、時旬に相応しい御守護が頂けるということを肝に銘じて、ぢば一条に心を結んで「心定めの完遂」と「おぢば帰りの推進」に勇んで励む年にしたいと思います。

最後まで諦めず

教祖が50年のひながたの道中で心を砕かれたのは、世界一れつをたすけることと、そのための用材を引き寄せて育てることです。つまりおたすけと丹精です。

しかもこれは、親神様の御守護を頂いて、教祖のお導きを頂いて進んでいくものですから、そのための理づくりと陰の徳積みは忘れてはなりません。日々の御恩報じの実践、物事を始めるときの理立て、ここ一番のつくし運びといっ

た真実の伏せ込みが、おたすけと丹精の理づくりになります。すなわち、おたすけと丹精、そして理づくりのための真実の尽くし、伏せ込み。これらは私たち教会長の務めであり、役割です。

年頭の心定めの完遂は、教会長の日々のおたすけと丹精の積み重ねによって御守護いただくのです。各教会が年頭に定める心定めは、単なる数値目標ではなく、ここまで勤めさせていただきますという一年間のおたすけと丹精の誓いです。

教祖は50年もの間、どんなことが起こっても諦めることなく丹精し続けられました。これは忘れてはならないひながたです。諦めは歩みを止めます。教祖を手本に最後まで諦めることなく、根気よくおたすけと丹精に真実を尽くして、心定め完遂への努力を重ねていきたいと思います。

前向きの心で

各々の教会の現状はさまざまです。厳しい状況の教会もあります。しかしどのような状況になろうとも、親神様の間違いない御守護にお導きいただくことを忘れてはなりません。私たちにはありがたいことに、ひながたの道があり、御存命の教祖がおいでくださいます。親神様の御守護にひたすらおすがりして、教祖にお導きいただけばよいのです。

親神様の御守護は心通りの御守護、私たちの目の前に広がっている世界は、心通り、いんねん通りの世界です。それ以上でもそれ以下でもありません。

一つ竜頭という、竜頭が狂うたら皆狂うで。狂わずして、日々嬉しい〳〵通れば、理が回りて来る。なれど、こんな事では〳〵と言うてすれば、こんな事が回りて来る。回りて来てから、どうもなろうまい。取り返やしが出来ん。　明治34年7月15日

とお仕込みくださっています。

目の前の高い壁を乗り越えようとするとき、あまりの高さに、できない理由ばかりを考えてしまう。そうなるとできるものでもできなくなる。目標に向かって進むときは、できる理由を考えることです。

修養科生一名以上、年頭の心定めの完遂は難しい目標かもしれませんが、何とか頑張ってやり切ろう、勇んで掛かろうという心になって努力をすれば、勇んだ姿を御守護くださるはずです。これが心通りの守護です。前向きの心で通れば、前向きの御守護をくださいます。

また教祖は「そっちで力をゆるめたら、神も力をゆるめる。そっちで力を入れたら、神も力を入れるのやで」、「神の方には倍の力や」とも仰せくださいます。教祖は決して誰も見捨てられません。

やって後悔するならまだしも、やらずに後悔をすれば、いつまでも悔いが残ります。そんなことでは、お姿を隠してまで成人を促してくださった教祖に申し訳が立たないと思います。

悔いなき年祭活動を

昨年の秋の大祭で真柱様は「三年千日の期間は、動かせていただくことが大切であります。一生懸命取り組んで、年祭の当日、おぢばへ帰ってきてもこなくても、その日をうれしい心で迎えることができるように、まだ三分の一残っている三年千日を、勇み心を奮い起こしてお通りくださるように」と仰せになりました。

私たちは教祖百四十年祭を目指して、仕上げの御用を勤めます。大切なことは一生懸命にやったか、全力でやれたかという点です。年祭を迎えたときに振り返るべきはその一点のみで、成果や結果はそこについてくるのです。わが歩みを省みて、一生懸命にやれたと実感できれば、心嬉しく年祭を迎えることになるでしょう。これが悔いなき年祭活動を勤めた一つの証になるのです。

教祖百四十年祭まで泣いても笑ってもあと1年、御存命の教祖にご安心いただき、お喜びをいただける成人を固く誓って、共々に心勇んで一生懸命に動き働いて、悔いなき年祭活動を勤め切らせていただきましょう。

（要旨）

《婦人会芦津支部委員部長講習会における講話》―後篇―

続・一言話が苦手な人へ 加えるエッセンス

本部員　中山慶純先生

男の理、女の理

朝夕のおつとめに「ちよとはなし」が出てきます。これは地と天とをかたどって夫婦を作ったとおっしゃいます。男は天、女は大地です。大地は土です。

土には肥やしやごみやいろいろなものが襲ってきます。襲ってくるけど、これをじっと土の中に埋め込むと、肥えた土になります。素晴らしい肥えた土になる。ここにまかれた種が立派に花を咲かせ、実を結ぶのです。だから女性の方方、嫌なこと、つらいこと、あんなこと言われた、こんなことになってきたなどいろいろあっても、それを跳ね返したら駄目です。跳ね返したら肥やしが身体につかない。これをやめて、ぐっと土の中に埋め込むのです。これができると素晴らしい女性になる。

それから男は男の理。男の人は天。天は上からだから、上から雨が降る。太陽がくる、雪も降ったり、いろいろな風も起こります。

天が大事なのは、あの人は、妻や子供は今、何を求めているか、どうやったら喜ぶか。これが分からなければ駄目なのです。この子供には今何を仕込めばいいか。これも分からなければ駄目です。子供の成長に応じたふさわしい仕込み、声が掛けられるか。雨を降らすか、照らすか、風が吹くか。この見極めができる男にならないと、結婚はうまくいかないのです。

親の目にかなっている

天理教は、片側だけでは駄目なのです。教祖は、2人の心を治めなさいとおっしゃいます。この2人の心を治めるというのは、何かのことも現れる。神様がどんどん働いてあげるよとおっしゃるのです。夫婦げんかをして向こうが悪いけれども、「いや、いいよ。私が悪かった。ごめんね」と謝ってその場が収まる。その場が収まったら、そこへ神様が入り込んで働く。お互いに正義を突っ張ねると、けんかになるから収まらない。収めなければ駄目なのです。

いつまでしん〳〵したとても
やうきづくめであるほどに
五下り目　五ツ

とおっしゃる。信仰しても陽気づくめでなければ駄目です。陽気づくめとは何か。それは次のおうたに出てきます。

むごいこゝろをうちわすれ
やさしきこゝろになりてこい
五下り目　六ツ

陽気ぐらしは、むごい心を打ち忘れて優しい心で通っていたら、それでいいのです。簡単ですね。これを人様にお伝えする。どんな信者さんでもこうしたお話ができる自信を持っていただかなくてはなりませんから、こうやって申し上げるのです。

ようぼくは必ず素質がある。ようぼくとして引き寄せられたからには、親の目に適っている。だから一言話も必ずできるのです。その素質を磨いてあげればいいのです。そしておたすけができるようぼくに育つように、私たちは丹精しなくてはなりません。

見習って成人をする

ようぼくにもいろいろな方がいます。

ある方は、真夜中に電話があって出ると、名前が違う。間違い電話です。とっさに「ありがとう」と声が出たのです。普通は間違い電話は「馬鹿野郎」ですよね。間違い電話に、「ありがとう」と言うのです。それはなぜか。夜中はつらい電話が多いのです。誰が出直した。誰が危篤になったといった緊急電話が多いのです。それが間違いだったということは、緊急で

なかった。だからありがたい。間違い電話でも、こうやって受け取って喜ぶのです。

また、私の家内はリュウマチです。一緒に参拝に行ったときに家内の心を読むのです。つらいかな痛いかな。そして「ああ神様、どうか治してくれとは言いませんが、なんとか痛みが弱って、痛みが減って、現役で長く生きてくれますように」と祈る。祈りも黙っていては駄目なのです。

隣に家内がいるのだから、聞こえないと駄目なのです。これはたすけの裏技なのです。表はおさづけです。裏は、相手の心をせめていく。「夫はこんな私のことを心配してくれているんだなあ」と気持ちが伝わってうれしくなるのです。うれしくなると自然治癒力が高まる。人間には自分で治ろうという力がある。

だから喜ばせてあげたらいいのです。自然治癒力が上がってくるのです。喜ばせるというお祈りをする。大きい声を出すのではなく、耳に入るか入らないかくらいの声ですーっと言うのです。その声がぎりぎり耳に届く。これくらいの祈りをするというのが、技なんです。これを皆さん、まねをしてみたらどうでしょうか。

そうすると、家内は一遍に私に対する扱いが変わるのです。親切になるから、ありがたいです。

また、ある夫婦は信仰は奥さんしかしておらず、主人は身上で入院している。主人は、天理教が嫌いなのです。おさづけしてあげようと言っても、いらんと言われます。でもなんとかたすかってもらいたいからと言って、真夜中、主人が寝てるときに、背中におさづけを取り次いだ。これをずっと続けていたのです。だけどとうとう危篤の状態になった。

そのときにご主人がこう言うのです。「私は、いろんな先生から治療してもらったり、入院中は世話になった人もある。だけどな、お前が夜中におさづけかなんかしらんけど、背中をずっとさすってくれたよな。あれが一番気持ちよかったよ。ありがとう」。ご主人は、おさづけのことは分からないけど、感謝の言葉を述べて出直していったのです。

これは、来世が楽しみです。来世はまたすぐ聞き分ける人になってくださるようになる。

だからおさづけに無駄はないのです。どんどんおさづけをさせていただいて心を動かす。身上は駄目だったけれども、この人の心が「嬉しかったな」と入れ替わってくれたなと、喜ばせていただくのです。

ようぼくにはいろんな方がいらっしゃいます。そういうようぼくを見習って成人しようねと、働きかけるときであります。

運命を変える

知床半島で２年前、観光船カズ１という船が沈みました。その直後、別の船カズ３が出ました。これは途中まで行って無事帰ってきました。無事に帰ってくる船を予約していた親子がいました。その親子がカズ３にそのまま乗っていたら、生きて帰ったのですが、直前になって子供を少しでも遠くまで乗せてやろうという親心でカズ１に乗り換えて命を落としました。

どちらを選ぶか、これが運命、運の強さ、運が強いか弱いか。親の愛はとても大事ですが、その愛を上回るものがあるということを知らないと駄目なのです。

これは運が強いか弱いかです。教祖は運を強くする方法を教えられました。それは、真実です。

桝井伊三郎先生のご逸話があります。真実はお母さんの運命を変えるとおっしゃいました。運命の変え方を教祖はいくつか教えておられます。これをしっかり自分の

ものにして、人様にお取り次ぎをすることが大事です。

1つ目は真実です。2つ目は恩です。恩が重なったら牛馬に落ちるといいますが、本当は牛馬にいく人は少ないのです。運命が落ちるのです。

恩が重なったら、これほど怖いことはありません。特に親の恩です。親はおしめを変えて、あなたを一生懸命育ててくれました。その恩を忘れて感謝もしなかったら、親孝行をしなかったら、運命が落ちるのです。これをしっかり覚えること。学校の先生にも、教会の先生にも恩があります。こういう方々に喜んでもらうように恩返しを考えましょう。

3つ目は徳です。徳というのは、釣り合うということです。徳いっぱいというのは釣り合うのです。

常岡一郎先生は大学に入ったけれど、間なしに結核になられます。おたすけにお父さんが来られて、「お前は、しっかり勉強して大学に入ったけどお前の徳は肺病と釣り合ったんだよ。徳を伸ばして、肺の上をいかなきゃ駄目だ。その方法はトイレの掃除から始めなさい」と言われました。

そして常岡先生は、大学を退学し、トイレ掃除の道具を持って、当時の汚かった東京のトイレ掃除を一生懸命されました。この徳積みをして、そして立派な布教師になられて、大教会長になるのです。

徳というのは運命を変える。徳通りの運命しかないんです。だから徳をしっかり積みましょう。

そして別席では、「人のために苦しんだら、後の楽しみだよ」とこう教えられます。自分のために苦しむ人はよくいるけれども、人様のために苦労したら、我が災難逃れる台と教えられるのです。

これは、先程の知床の海難でもそう。これから南海トラフ地震がいつくるかわからない。この人間世界を創られた親神様がそういう構造にされているから、これは必ず来るのです。これだけは来ないでくださいと神様にお願いしても駄目なのです。南海トラフ地震が来たときに、この辺りにいるかいないか。よそからわざわざここに来る人もあります。ここにいてもどこかに旅行に出ているかもしれない。これが災難逃れる台ということになるのです。例えば、大洪水が起きたとき、目の前に大木がずらーときたらそれに捕まれば、命は守られる。その助け綱が来るか。たすけ綱のためのおつとめです。年祭に向かっては運命を良くする。このたすけの綱がくるように、今から伏せ込んでおくのです。

もう一つ大事なのは、密着です。ぢばと密着、親との密着。

福島の三春の桜という有名な桜がある。それが枯れ始めた。えらいことだと調べると、道を普請したときに根から土が離れているのです。この空間があるから枯れるのです。

栄える理というのは根にしっかりと結びつく密着。だからぢばから離れてはだめです。親から離れたら駄目なのです。

感謝と恩返しの信仰

これからはたくさんのようぼくが年祭の動きを感じないといけません。今は大事なときだと、年祭を感じ取る、そしてそれに向かって取り組むように働きかける。

もとさいかしいかりゆうてをいたなら
なにをゆうてもみなきゝハける
十号　53

これをしっかり知って、実の神を知る。元こしらえた神様はここにいらっしゃる。実際に働いてくださる神様が、この手の中にある、身体の中にある。元の神・実の神をしっかり今は心に治めて、ようぼく一人ひとりみんながそれが感じ取れて、教祖にお喜びいただけるように、ありがとうの信仰をするのです。こんなに守られてありがたい。ちょっとでも、恩返しさせていただこうと。

感謝と恩返しの信仰をしっかりとこの機会にしていただけるようにご丹精いただきまして、婦人会委員部長としての御用を務めてくださいますよう、お願いをいたしまして、話を終わらせていただきます。

（要旨）

教務部報

教養掛（1月）主任
樋川　泰士

教養掛
石﨑　真人・佐藤　敏幸
岩切　孝子

修養科第1001期修了
阿佐　信裕（脇　東）
大澤　光子（東天童）
立教188年1月27日

おさづけの理拝戴《12月》
吉田　百花（今津原）
前田　　聡（奄美笠）
森山　笑太（芦　南）
麻田　悠介（芦島鶴）
井上　真貴（理　風）
井上　祥希（理　風）
福島　佳代（周　宝）
〈拝戴日順　7名〉

初席《12月》
〈6名〉日方
〈2名〉畦川、脇町、脇東、本氣
〈1名〉春日出町、島百合、東大屋、津阪、名瀬港、入江、豊野、鎮名
〈順序運びより　22名〉

■訃　報■

大教会婦人
天保山分教会五代会長夫人
森内博子さん

令和6年12月22日出直された。享年91歳。

告別式は12月25日、井筒文夫・大教会役員斎主のもと、東大阪市内の葬祭場で執り行われた。

昭和8年鹿児島県奄美市にて父・加世田隆大島分教会四代会長、母・ウスヰの三女として生まれ、27年大島女子高校卒業、30年おさづけの理拝戴、同年修養科第174期修了、38年森内富雄氏と結婚、39年教会長資格検定修了、58年大教会婦人登用。

大教会では婦人会芦津支部委員、天保山委員部長として、親一条に御用に励まれた。また教会では会長夫人として内を治め、部内教会やようぼく信者の丹精に心を尽くされ、多くの方を導かれた。

大教会婦人
山本政子さん

令和7年2月1日出直された。享年88歳。

告別式は2月8日、井筒文夫・大教会役員斎主のもと、大教会よふきホールで執り行われた。

昭和11年兵庫県神戸市にて、父・瀧本信一郎富島分教会三代会長、母・ならゑの次女として生まれ、29年神戸高校卒業、31年おさづけの理拝戴、37年修養科第253期修了、同年山本範男氏と結婚、40年教会長資格検定講習会修了、同年教人登録、48年大教会准婦人、61年大教会婦人登用。

大教会の入り込み人として、長年にわたり炊事の御用を担われ、帰って来られる信者に食事の世話取りなど、誠心を尽くされた。

また婦人会芦津支部委員として、教祖のひながたを辿ることを我が心とし、みちのだいとして親の御用第一に勤められた。

月例統計（自令和6年1月1日～至令和6年12月31日）

名称（）内教会数 ＼ 項目	初席	おさづけの理拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	9	7	1	
靱（13）	8	1		1
東津（23）	11	2		
吉野川（29）	15	5	2	1
島原（16）	23	5		2
日方（15）	22	5	4	
稗島（7）	7	1	1	
本津（2）	2	1		
日高（2）				
姶良（5）	1		2	
津和（12）	4	3		
門司（6）	8		1	
當別（6）	2			1
大島（26）	25	14	2	2
沖縄（3）	2			
尼崎（2）	1		1	1
四ツ山（5）	2	3		
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）				
青木（1）				
芦浪（1）	4	2		
甲邊（1）	1			
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）	1			
豊野（1）	1			
紀周（3）	12	1		
勝明（1）				
神の島（1）		1		
兵庫眞洲（1）	2			
芦ノ郷（2）	2			
本明勇（2）	1	1		
明道（1）	4			
芦東（1）				
和鎮（3）	4			
神滝本（1）				
芦明徳（1）	1			
真明彰化（2）	33	4		1
本氣（2）	2			
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	210	56	14	9